チリ・パタゴニア1968-69 ――ある学生探検の記録 第10回

美しく楽しい晴れの日々

安成哲三 やすなり てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学，地球環境学)

イラスト＝安成 晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載していただくことになった．

前回(第9回，12月号)は，氷河上に生きる水生昆虫の「発見」や氷河湖周辺での動植物の観察，氷河湖の湖面振動の観測などを通して，私たちがめざしていた探検の原点は何だったか，再認識したことなどを語った．今回は，氷河地域の滞在も終わりに近く，珍しく無風快晴となった短い日々，付近の山登りを楽しみ，湖畔キャンプでの神秘的な夜を体験した下りを報告する．

楽しき山登り

1月30日．一日中雨．朝から雨が降っていると，テントから足を出すのがいやになる．テントの中できく雨音はまたいやに大げさにきこえる．昼を過ぎても，誰も起きてこない．寝袋の中に入って，ひとり考えにふける．年がら年中雨のようなところだから，少々の雨でも動かないと仕事にならない．今日は，雨なら海岸までの植生をもう一度調べようということにしていた．が，それさえ雨をついてまでやろうというものが出てこない．モレーン付近と海岸近くは1 kmそこそこしか離れていないし，歩いた経験からもほとんど違うまいと，かってに合理化してしまう．だいいち，植物に関して日本でほとんど調査経験もなく，興味もなかった者に，いったい何ができるかとも思ってしまう．では，ぼくのテーマの古地磁気学調査はまともにやれるのか．日本で，ほんの1,2回フィールドに出て，少しばかり文献を読んで，専門家の話をきいただけではないか．このエカウク湖一帯でなぜ調査をしないのかと他の隊員に質問されたことがあった．この辺は堆積岩と変成岩だからダメなのだとのぼくの返事に，なぜそんな岩ならダメなのかとやりかえされた．ぼくはまともな説明ができなかった．ぼくの古地磁気学もそんな程度だ．やはり学生の学術探検は無意味なのだろうか．少なくとも行きたいから行く式の発想による探検は，もはや終わりだろうか．

午後4時過ぎ，やっと小降りになってきた．腹もへった．そろそろメシでも炊くか．外へ出て，朝昼晩兼用の食事を食っていると，HPS10氷河の先端に虹がかかった．

1月31日．天気は回復する．寺本巌，井上治郎(あだ名「ジロー」)とぼくは，キャンプの真北，エカウク湖の対岸の尾根を登り，最初のピーク(900 m位か)まで行くことにした(2004年9月号第6回図2参照)．高みから，湖と氷河の状態を把むのが目的だが，山登りには違いない．

湖岸に沿って湖のまわりを半周し，尾根に取りつく．最初は急な岩場だ．苔がズルズルはげて登りにくい．やがて倒木といばらのやぶとなる．しだいに木がまばらになり，今度は草とかん木の急斜面となる．かん木は，やはりチリ・ブナの一種だが，ロブレ(*Nothofagas pumillo*)にかわる．10 m前後の滝に出くわす．滝の横をシャワークライミング．久しぶりの沢登りの感触．急斜面は急に緩くなり，むしろ下り気味にさえなる．広大な平坦地に出る．氷河で侵蝕された岩盤に特有な，小さく波うつ露岩．岩と岩の間は，湿地となっているところが多い．それにしても，こんな台地があるなんて，湖岸で見ている時は想像もできなかった．取りつきからピークまで同じような斜面が続いているように見えていたのに．

ふたたび急な岩尾根となる．大岩壁にぶつかり，ルートを左手の岩の切れ目に取る．ロブレは，はい松のような耐雪形態になってきた．尾根の左手の谷には，上流側に向かって凸のきれいな円弧を描いたクレバスを持つ氷河がある．クレバスごとに氷河面の高さが違い，円弧の階段をつくっている．ずっと下方には，ジローと2人で見つけた奥の湖が，灰白色の水をたたえている．雪崩があったのか，浮氷が，岸の一点を中心とする半円になって浮いている(図1)．やがて，尾根が一旦くびれて水をたたえた小さな池に出た．美しい．少し上の雪渓から流れ出ている水の一部が，その池に流れ込む．池からは滑滝になって，尾根の右側の斜面にあふれ出ている．雪渓からの水の残りは，尾根の左側の斜面に落ちている．2つの流れを分ける付近は小石や砂利の川原になり，水流の不安定なことを物語っている．ふしぎな地形だ．高度計は660 mを示している．昼食を済ませ，細い溝に雪がつまった，陰気な雪渓をキックステップで登る．やがて，広大な雪渓に出る．目指すピークは雪渓の上にある．剣岳や穂高付近にいるかのような錯覚を起させる．急な雪渓を一歩一歩踏みしめて登る．剣岳の兵蔵谷の上部程度か．やっぱり，山登りは楽しい．雪渓の途中から，岩場にうつる．ここはもう，あのHPS10氷河に取りつくまでの，つるつるの岩場ではない．かたい登山靴の底がピッタリと慣じむ日本アルプスの感触だ．

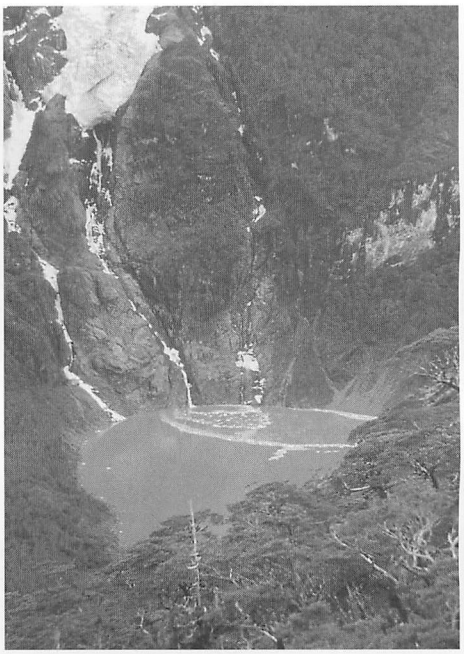

図1——氷河がぶら下がるように架かっているすり鉢状の小さな湖．

午後3時，ピークに着く．ちょうど900 mだ．エデン以来の高みの見物に，3人共，スカッとした感じだ．改めて景色を見る．はじめて見るHPS10氷河の全貌．リソ・パトロン山塊から急激に氷瀑となって落ちてから，まるで人間の胃袋の断面図のように，カーブしながら急激に幅を拡げている(図2)．そして，網の目のように走るクレバス．ふたたび急激に幅を狭めて，エカウク湖に流れ出している．湖から川への落ち口には，扇子形のふちに沿って氷山が並び，湖に栓をしているかっこうになっている．川は大きく蛇行しながら海へ流れ出ている．ファルコン・フィヨルドには，星を散りばめたように流氷がいっぱい浮いている(図3)．エカウク湖の背後の，何本もあるモレーン丘は，それに沿って木が並んで生えているのですぐわかる．平地で，一生懸命測量して，湖付近や氷河の地形について，ああだこうだと言っ

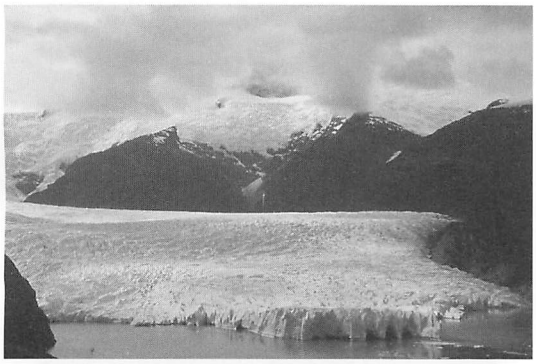

図2――HPS10氷河中・下流域の全貌.

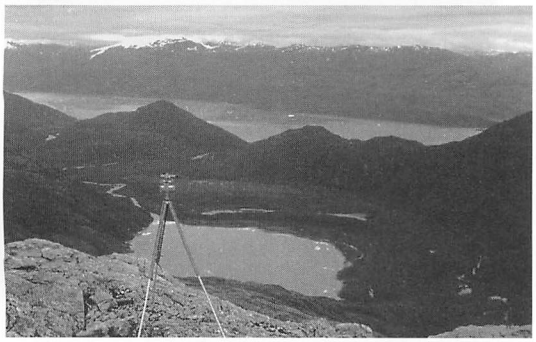

図3――エカウク湖と湖からフィヨルドへ流れる川. 湖から川への落ち口には氷山が栓のようにつまっている. 遠景のフィヨルドにも流氷が見える. 手前は測量用のトランシット.

ていたことが, 高みから見れば, 一目瞭然だ. もちろん, 数値的に細かいことは分らないが, ものごとはまず大ざっぱに把んでからやらねば無駄が多い.

もう少し奥へ行ってみよう, とぼく. ジローは, ちょっとばかり奥へ行ってもしょうがないという. そんなことはない, ここはまったくの人跡未踏地だ. 何かあるかもしれない. 第一, そんな期待と不安を持って未踏の地を歩くこと自体, 楽しいではないか. これには, 寺本氏も加勢して, じゃ行こうかということになった. 尾根のところどころには, 雪田が残っている. 縞のたくさん入った変成岩が出てきた. 縞の間には, まるで腐った木がはさまれたような腐蝕が見られる. 何かわからない. 岩石の知識の乏しさを痛感する.

岩尾根は急にストンと切れ, いったんコル(小さな峠)になって本格的な万年雪の地帯に入っている. クレバスも見える. 尾根は, エクスマウスフィヨルドとの分水嶺につき上げている. その分水嶺上には, 三角形をした雪のピークがそびえている. 湖岸キャンプからちょこっと姿を見せており, 白馬岳に少し似ていることから, 「白馬」と呼ばれていたピークだ. コルの手前で深追いはやめ, 氷陸部を見やる. 白馬のある分水嶺は, 氷陸の端へと続いている. ベタッとした大雪原がすぐ手の届きそうなところに見える. 雪原の上を, 雲の影が流れる. そういえば, 六甲隊は順調に進んでおれば, 今見えてるあたりに居るはずだ. そう思うと, 黒い点のようなものが見えないでもない. が, 居たとしても少なくとも30 kmは離れている. やはり無理かな. ふと, 右手の谷を見おろす. かつて谷の側壁から落ちていた氷河がきれいなドーナツ型のモレーンを残している. 中は丸い湖となり, 白く氷が一面に浮んでいる. そのドーナツ型モレーンが谷をせき止め, 上に大きな湖を作っている. 氷河のなせる美しい造形だ(図4). 白馬には登りたいが, 時間と食料とピッケルがない. もう数時間も歩けば登れそうだが, あきらめる以外にない. 帰りは大雪渓をグリセード*で降りる. ピッケル代りに, トランシットの三脚でバランスをとる. 天気はどんより曇ってきたが, 気分はそう快だ. キャンプからは, チェーンソーのうなり

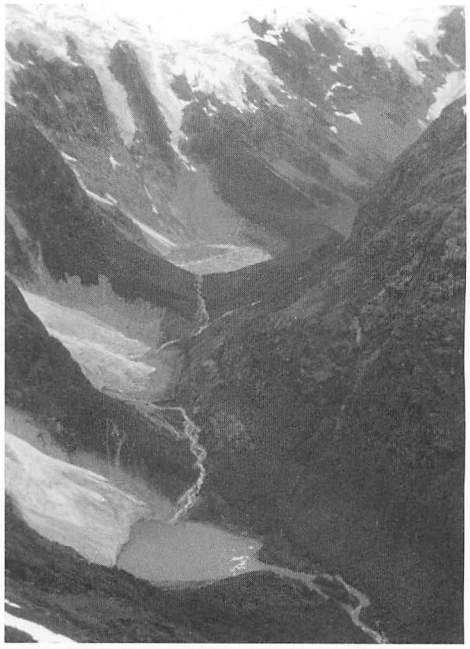

図4――いくつかの氷河のモレーン(堆積物)で塞き止められた湖が何段にも連なる不思議な地形の谷.

* 急な雪の斜面を, ピッケルや杖で体を支えながら足で滑る技術.

声がきこえ，煙が上がっている．急に腹が減ってきた．

神秘な夜

2月1日．「快晴や！　起きろ」とジローの声．大快晴だ．こんな晴天は，今年に入ってから初めてだ．1カ月のエカウク湖畔滞在中，ほとんど雨天だった．晴れたのは氷河上で半日持った程度だ．が，この晴れは本ものだ．リソ・パトロン山塊，HPS10氷河をはじめ，エカウク湖のまわりのすべての山々が朝日に輝いている．全員，カメラを持ち出しパチパチと撮りまくる．曇ってエカウク湖付近だけしか見えぬ陰うつな景色には，そろそろ食傷気味になっていたところだった．

皮肉なことに今日から撤収だ．湿ったものを外にほうり出し，裸になって撤収の整理をする．暑い日ざしに全員やや気だるい感じだ．海岸キャンプまでの運搬はゴムボートの川下りでやろうと誰かが言いだした．またモレーン丘を越え，湿原に苦労するボッカを思ってうんざりしていたところだ．やってみよう．全員一致した．が，最初の激流を荷物を乗せて下ることは冒険だ．荷物の確保という意味からもやめておこう．午後から3人が，激流の済んだ地点までのルート工作に出かける．井上民二(あだ名「ブンヤ」)とぼくはあとからゴムボートと若干の荷物をかついで行く．川下りを始める地点は，ちょうど大湿原手前のモレーン丘が川につきあたった付近だ(図5)．このモレーン丘の湿原側の斜面は，なぜかシプレ(*Cypres*)，即ちひのきが多い．直径は1mほどもあるのに，高さはほんの3,4mしかないグロテスクなのもある．

ブンヤと2人で試しに50〜60kgほど積んで下ってみる．快調だ．青空に冴えた両岸の原始林の緑が目にしみる．原始林の後には，HPS10氷河とは湖をはさんで反対側にある左氷河群が見える．フト気がつくと，水がかなり入っている．途中浅瀬になったところで降り，川原に上げて底を調べると，カギざきに数cm破れている．底に置いた背負子の上に座っていたためだ．とにかく合流点までなんとか行きつく．が，これで，荷物の置き方と座り方さえ気をつければ，川下り運搬は十分やれることがわかった．

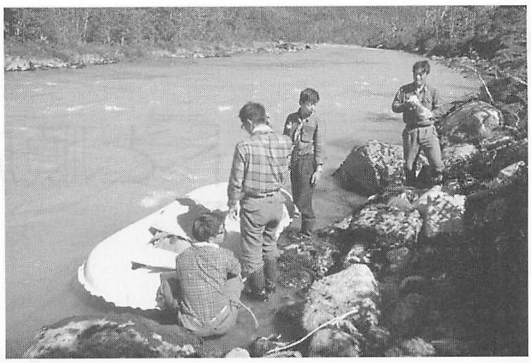

図5——ゴムボートによる荷下ろしを始める岸辺にて．左から井上治郎(ジロー)，井上民二(ブンヤ)，安成，伊藤隆の4名．撮影: 寺本巌氏

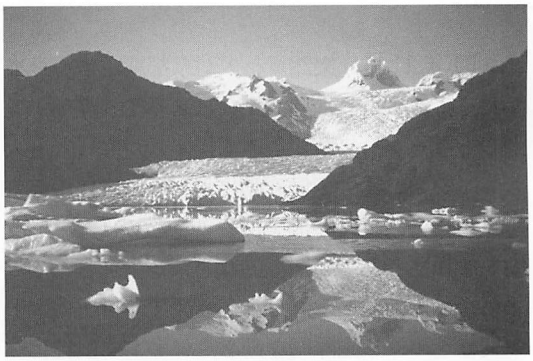

図6——静か夜の湖面に月光で映りだされたリソパトロン峰とHPS 10氷河．数分間の露出により撮影．

夜．コイウエの丸太を組んで大きなファイアをつくる．湖岸キャンプに全員泊まるのは，今日が最後だ．全員景色の素晴らしさに気をとられがちだ．折しも今日は満月だ．夜半だというのに，リソ・パトロン，HPS10氷河は月光に照らし出され，昼間のようによく見える．赤い木星が山の端に顔をのぞかせている．トランシットでのぞくと，まわりに点になって4つの衛星が見える．満月と反対方向の夜空は星の世界だ．銀河，見える星数が全体に北半球よりうんと少ない南半球では，まさに河として，銀河が見える．そして南十字星．鏡以上に平らなエカウク湖面には，氷河，山々，月，そして木星などいくつかの星さえ映っている(図6)．湖岸付近の流氷の間には針状模様に結晶した薄氷が張りつめ，明るい月光がその上に砕ける．時折，氷がひっくり返る音が夜のしじまの中に響く．